

ビルマ共産党の現状

大 野 徹

まえがき

ビルマ共産党（いわゆる「白旗共産党」）が非合法化され地下活動に転じてから既に20年の歳月がたつ。この間、1948年3月から12月までは中部ビルマのピインマナーで、1950年3月にはプロームで、それぞれ人民政権を樹立したこともあったし、1950年12月には上ビルマのカター県一円に勢力を張ったこともあった。¹⁾ 1962年3月、革命政府が登場してから、その性格判断をめぐって共産党最高幹部の間に意見の不統一が起こったため、党の活動はしばらくの間精彩を欠いていたが²⁾、1963年の「和平交渉」³⁾ 決裂後は、徹底した反政府、反ネーウィン路線が打ち出され、各地で猛烈な政策妨害⁴⁾、鉄道線路爆破、列車転覆⁵⁾、殺人等の行為が続発するようになった。

もっとも、ビルマ共産党の動きは、ビルマ

- 1) 大阪外国語大学ビルマ語研究室編『ビルマ史年表』（1960年8月）、pp. 68, 71, 76, 78.
- 2) 大阪外国語大学ビルマ語研究室編『ビルマ研究』IV(1968) pp. 19, 23, 24.
- 3) 革命政府と各種国内叛徒との和平交渉については、大野徹「ビルマ社会主義への道—解説と邦訳」『東南アジア研究』第3号（1964）を御参照願いたい。
- 4) 大野徹「ビルマの現状」『東南アジア研究』第5巻第2号(1967)、p. 186.
- 5) ダイナマイトによる列車転覆事件の激増に対処するため、ペゲー県（1968年6月29日）、プローム県（7月2日）、ターヤーワディー県（7月4日）、タウングー県（7月5日）で、それぞれ公安条例第144条（夜間外出禁止令）が発令された。従って、夜間、許可なくして線路内に立ち入った者は射殺されることになる。

の首都ラングーンにおいてさえなかなかつかみにくい。まして新聞記事はすべて政府の検閲下にあると考えてさしつかえない現在、その新聞だけを唯一の資料としている私にとっては、はたして報道記事のどこまでが真実なのかを判断することはほとんど不可能に近い。しかし、他に信頼すべきニュース・ソースを持っていない以上、結局新聞の報道記事に頼らざるを得ないことになる。そこで、遺憾ながら本稿の記事自体が必ずしも信憑性に富んでいるとは断言できないことをあらかじめお断りしておく。

本稿では、1967年5月27日から1968年9月29日現在までのビルマ語日刊紙「労働者人民日報」を基に、ビルマ共産党の現状を整理分析してみた。⁶⁾ 出所を明らかにするため、新聞の日付はすべてかっこに入れて示してある。「労働者人民日報」以外の資料を用いた場合には、いちいち名前を明示したが、「労働者人民日報」の場合は日付だけにとどめた。

I 文化大革命の影響

中共の文化大革命の影響は、後述のごとく修正主義者の粛清、「紅衛兵」の組織化等、ビルマ共産党にも大きな影響を及ぼした。ことに、委員長タキン・タントゥンを中心とする毛沢東支持派と、ゴシャル、イェーボー・テーを中心とする反毛派との対立が激化、遂

- 6) 本稿の一部は、「ビルマ共産党の動向」と題して、大阪外国語大学ビルマ語研究室編『ビルマ研究』IVに掲載した。

に少数派のゴシャル、イエーボー・テー、タキン・タンマインの3人は肅清された模様である。その第1報は、イエーボー・テインミン（ビルマ共産党中央本部事務局長）によってもたらされた。テインミンの説明によれば、過去数年間のビルマ共産党の動きは次の通りである。（1967年6月15日付）

“共産党内部では1964年頃から主義主張の対立が起こり、ことに中央委員会内部で激しい思想戦が展開された。その結果、タキン・タントゥンを擁する一派とイエーボー・バティン（一名ゴシャル）、イエーボー・テー等のグループに分かれた。タントゥン一派は政治局、中央委員会、下部組織を問わず広く党内に思想の浸透を画策し、反対派への弾圧を強行した。肅清はまず中央本部とペゲー山脈管区内で開始され、タントゥンの考えを信奉しない黨員達が「党の裏切り者」「革命の反逆者」というレッテルを貼られ、逮捕監禁された。そして1967年4月27日、タントゥンの考えをどうしても受け入れようとしめない政治局員ゴシャルとイエーボー・テーの2人が「党の規律を乱した」という理由で、政治局員、中央委員の職から追放され逮捕された。現在2人の消息は明らかでない。”

ゴシャルは、1939年ビルマ共産党結成当初からの生え抜きの黨員であり、1948年2月、いわゆる「ゴシャル・テーゼ」を発表して共産党の実力行使の理論的支柱となった人物である。イエーボー・テーは、1963年の国内和平交渉の際、ビルマ共産党代表団長として活躍した人物であり、追放されるまでは党中央委員会の書記長であった。

党内における思想対立の内容や詳しい経緯は明らかでないが、両派の対立が1964年頃から表面化してきたということから考えると、中共の文化大革命の影響をこうむるかなり以前から既に対立の萌芽があったことは明らかである。内容的にも単に党の基本綱領、闘争

路線、組織活動等に関する意見のくい違いだけにとどまらず、(1)中ソ論争への反応、(2)ビルマ革命政府の性格規定およびその施策に対する評価、(3)1963年に行なわれた革命政府と共産党との和平交渉不成立に対する解釈の相異、(4)中共の文化大革命の影響等をその主要な原因として数えあげることができよう。

このうち、(1)についてイエーボー・タンは次のように述べている。（67年8月7日および10月2日付）

“中ソ論争が激化し始めた頃、ビルマ共産党内部にも中共派、ソ連派という二つのグループが生じた。「中共派グループ」にはタキン・タントゥン、タキン・バティンティン、タキン・ジン、タキン・チッ、タキン・ティントゥン、イエーボー・テー、イエーボー・トゥッ、ボウ・ゼーヤ、タキン・ペーティン、ボウ・ミョウミン等があり、一方「ソ連派グループ」はゴシャル、タキン・タンマイン、イエーボー・アウンダー、イエーボー・トゥンマウン、イエーボー・ソウタン、ボウ・ヤンアウン等で構成された。その後、イエーボー・トゥンマウン、ボウ・ヤンアウン、イエーボー・アウンダーの3人が親中共派に、イエーボー・テーが親ソ派に鞍替えした。ビルマ共産党内部でのこの「中ソ対立」は、1966年初頭から激化し、1967年には完全に2派に分裂した。分裂は、党本部から管区、県、郡の末端組織にまで波及した。”

(2)について、イエーボー・チーアウンは次のように解説している。（68年1月6日付）

“1960年モスクーで開かれた81カ国共産党会議にビルマ共産党代表として出席したタキン・バティンティンの演説を基盤として決定された1962年路線によれば、「革命評議会は資本家階層を代表する軍事政権である」と規定されており、「この軍事政権は武力で打倒されねばならない」とされている。” また、ボウ・ミンディン（ビルマ共産党タウングー県

委員、1967年12月6日投降)によれば、『1964年路線によって「ネーウィンは人民の最大の敵である」ということになった』という。

(1967年12月19日付) これらがタントゥン派の公式見解だとすれば、ゴシャル派では次のような見方をしていた。イェーポー・タンの解説によれば、ゴシャル等の見解は次のように要約される。(67年9月14日付)

(i) 革命政府は、まだ戦闘的色彩を残しているとはいうものの、目下資本主義路線から離脱しようと努力している。

(ii) 完全な社会主義路線には到達していないけれども、その指向しているところは社会主義である。

(iii) 帝国主義諸国とは今でも接触してはいるが、帝国主義的な組織や資本の導入を排斥している。

(iv) 帝国主義国からの資本侵入を防止するため銀行を国有化した。

(v) 帝国主義、資本主義的な資本投下が行なわれていた BOC, Steel, Bombay Burmah, Namtu Mine 等の企業を国有化した。

(vi) 社会主義諸国からの援助協力で工業開発を進めている。

(vii) 社会主義経済体制の建設を意図し、国家資本の長期蓄積に取り組んでいる。

ゴシャルは、また次のようにも語っている。「革命政府が資本主義路線から離れて社会主義路線を進んでいるという事実には、われわれは目をつぶってはならない」(67年9月14日付)

第(3)の点、すなわち1963年革命政府から国内各種叛徒に対して行なわれた「国内和平交渉」問題に関する共産党の反応はどうであったか。この点について、ボウ・ソウリン(ビルマ共産党タウンゲー県委員、1967年8月9日投降)は次のように述べている。(67年8月19日付)

“国内和平交渉の呼びかけが行なわれた際、共産党内部には交渉に応じるといふ点では異

存はないけれども、いかなる主張を行なうかという点について、i) 従来の路線をそのまま踏襲する。ii) 現実に即した路線を採択する。という二つの意見に分かれた。”

ゴシャル、テーの監禁説に続いて、8月に入ると両人の粛清説がボウ・ソウリンによってもたらされた。同時に、タキン・タンマインの粛清説も伝えられた。ソウリンによれば、

(1) 北京に行っていたビルマ共産党政治局員タキン・タンマインは、修正主義思想に追従しているという理由で、ビルマ共産党第1副委員長タキン・バテインティン等のグループによって粛清された。

(2) イェーポー・テーとゴシャルの2人も粛清されたものと信じられている。

(3) イェーポー・テーとゴシャルの考え方は1955年路線のままである。

政治局員3人の粛清説に続いて、1968年4月になると、中央委員ボウ・ヤンアウンの粛清という事実が明るみに出された。これは、1968年4月16日、ブローム県とターヤーワディー県境のペグー山脈にあるビルマ共産党本部を攻撃した中央軍管区司令官ティンウー大佐、第77師団副師団長ティンチョー大佐等に率いられた第77師団の共産党討伐作戦の結果、判明したものである。(68年4月19日付) それによると、ボウ・ヤンアウンは、タキン・タントゥン、タキン・チッ、タキン・ジン等によって、ゴシャル、テーの追随者だと非難され、1967年12月26日処刑されたという。その時押収された多数の党機密重要書類によって、テー、ゴシャル粛清の事実も確認され、同時に粛清前後の経緯も明らかにされた。それらの文書を基に、イェーポー・アウンカインは次のように解説している。(68年4月27日、5月5日、5月11日、5月19日、5月26日付)

“ターヤーワディー県北端、ブローム県南端の県境に設けられていたビルマ共産党中央本部で1967年4月27日人民大集会が開かれた。

その席上、ゴシャル（タキン・バティン）、イエーポー・テー、イエーポー・バケッ（テイン・ミイン）の3人が解任逮捕された。そして5月1日に開かれた集会で、紅衛兵層から前記3人に対する処刑要求が出された。この要求は、タキン・タントゥンおよび北京帰りの党員達によって採択され、6月9日人民裁判にかけて審査された。判決の結果、テーとバティンの両名は、1967年6月18日午後2時、党中央本部の近くで処刑された。”（68年4月27日付）

ボウ・ヤンアウンは、シリアムにあるBOC⁷⁾の労働運動指導者であった。後、タキン・フラマインという名でビルマの独立運動に参加、アウンサン将軍、ネーウィン将軍等と共に日本軍（南機関）の軍事訓練を受けた、いわゆる「三十人の志士」の一人である。日本軍のビルマ統治時代には、ボウ・ゼーヤの下でビルマ防衛軍（BDA）第3大隊の副隊長をつとめたこともある。⁸⁾

シリアム石油労働運動の指導者タキン・フラマインとして、また、いわゆる「三十人の志士」の一人としても著名なボウ・ヤンアウンの一生は、共産主義一筋に貫かれていたと言ってよい。彼は1939年のビルマ共産党結成以来の古参党員でもあった。「共産主義を信奉し、共産主義に殉ず」というのが彼の固い信念であった。だからヤンアウンは、あらゆる場合個人の利益よりも党の利益を優先した。

1964年後半起こった共産党内部の対立・分裂にヤンアウンは強く反対し、レーニン思想に基づく党の団結こそが焦眉の急であると主張した。中央委員の一人でありながら、ヤン

アウンは、1964年の中央委員会議への出席を拒まれた。

1967年4月5日、ターヤーワディー県とプローム県の境にある共産党本部で管区委員と県委員のみの高級幹部会議が開かれた。議題は「ビルマ共産党の基本活動と綱領」であった。席上、イエーポー・バケッが党内分裂問題を議題として追加上提せんとしたため、議長タントゥンは、北京帰りの党員を主体とする紅衛兵達を中央本部から召集して、拡大会議に切りかえてしまった。それを苦々しく思ったボウ・ヤンアウンは、「本会議は党の死活問題を討議するために出席資格が高級幹部のみに限定されている。にもかかわらず、中央委員会の決定が無視されて、多数の青年男女が出席している。私は、このような不明朗な会議には反対する」と抗議して退場してしまった。それ以降、ヤンアウンは、和平主義者、裏切り者とよばれるようになり、テー、バティンの粛清後は、「その信奉者を一掃する運動」の筆頭者にあげられるようになった。

1967年11月25・26両日、タントゥン一派は「党の分裂を企て、権力の奪取を謀り、スパイ活動を働いた」という理由で、ヤンアウンを非難し、(1)テー、バティン一派の分裂活動、反革命運動を報告し、(2)自らの誤りを告白し、(3)自己批判せよと迫った。12月11日ヤンアウンは、自己批判書をタントゥンに提出し、自ら党の裏切り者であると自供した。12月15日、タントゥン一派は、30年も党員として活動してきた同志ヤンアウンを中央委員会から追放し、党籍を剝奪した。そして7人、7人、3人から成る次の三つの委員会を設けて、ヤンアウンを裁いた。

- (1) 調査委員会—タキン・チッ、ボウ・ゼーヤ、イエーポー・テッ、イエーポー・トゥンイー、イエーポー・ソウウィン、イエーポー・トゥンミイン、イエーポー・キンチョー
- (2) 検察委員会—イエーポー・ニョウアウ

7) BOC は国営化されて、現在 People's Oil Industry (POI) とよばれている。

8) ボウ・ヤンアウンについては、太田常蔵『ビルマにおける日本軍政史の研究』(昭和42年)、泉谷達郎『ビルマ独立秘史』(昭和42年)、ボウ・ターヤー『志士三十人の凱旋』(ビルマ文)、ボウ・タンダイン『独立闘争の記録』(ビルマ文)(1967年)、セインティン『志士三十人の碑』(1968年)等で述べられている。

ン、イエーポー・ティンマウン、イエーポー・テッ、イエーポー・ニョウ、イエーポー・チウエー、イエーポー・トゥンイー、イエーポー・タウンシュエ

(3) 判事組織—タキン・ジン、タキン・チッ、タキン・プ

こうして、ヤンアウンは、1967年12月26日、紅衛兵および監視兵の手によって処刑された。(68年5月5日付)

ボウ・ヤンアウンの粛清後も、修正主義者の摘発が行なわれており、すでに、イエーポー・ミヤ、イエーポー・ソウタン、イエーポー・トゥッ、イエーポー・トゥンマウンの4名に対して自己批判が要求されている。(68年5月11日付)

これら一連の記事から、ビルマ共産党内部における修正主義者、反タントゥン派の摘発粛清が徹底した形で続行されていることがわかる。同時に、この事は、党内における派閥争いで、反タントゥン派が完全にタントゥン派に敗れたことを意味する。

1968年9月19日、タウングー県のペグー山脈内にある共産党本部と中央マルクス・レーニン学校が政府軍第77、第88師団によって攻撃され、管区委員、県委員多数が射殺されたが(68年9月24日付)、その時押収された党の機密重要書類およびタントゥンの日記によって、さらに北京帰りの党员2名と紅衛兵5名の粛清という事実が明るみに出された。

(68年9月25・26日付) 北京帰りの党员で粛清されたのはボウ・トゥンニエインと、トゥンシェインの両名である。

トゥンニエイン(別号チャーター少佐)は、ミインジャンの出身で、戦時中はビルマ防衛軍の軍曹であった。1948年の共産党非合法化と共に地下に潜り、人民軍第2師団(師団長ボウ・アラーワカ、現上流管区委員)の大隊長となり、1952年までその職にあった。19

53年ミインジャン県委員のまま中共へ派遣されたが、「和平交渉」の時、呼び帰された。「和平交渉」決裂後は、党本部、中央マルクス・レーニン学校の軍事担当教官となったが、次第に頭角を表わし⁹⁾、以後タントゥンの腹心として活躍、共産党の殺人、破壊路線の強力な推進者となった。

テー、ゴシャル、ヤンアウンの粛清後は、対政府軍反撃司令官に任命されたが、戦略面でタントゥンと衝突、逮捕された。理由は、(1)武装して党本部に対立した、(2)修正主義的戦術転換を行なった、(3)党と軍を破壊せんとした、(4)革命戦を破壊した、(5)派閥を結成した、(6)権力奪取を企んだ、(7)修正主義的暴力活動を行なった等である。

1968年8月7日、党本部に呼ばれたトゥンニエインは、その場で逮捕、監禁され、8月15日には、党中央建設代表者の身分と党籍を剥奪された。そして“55年路線の信奉者、委員長への謀叛者、政治局への反逆者というレッテルをはられ、8月30日、デルタ管区女性軍小隊の手によって処刑された。”(68年9月25日付)

トゥンシェインは、マンダレー県の出身で、第二次大戦前にラングーン大学予科を卒業、1945年カルカッタ大学に進学した。後、学生連盟地下執行委員となり、チェコスロバキアの世界学生連合へ派遣された。1950年にビルマ共産党员として中共に入り、1963年9月「和平交渉」問題が起こるや、ビルマに呼び戻された。トゥンシェインに対する告発理由は、(1)タキン・タンマインの信奉者であり、(2)テー、ゴシャル、ヤンアウン等修正主義者の一員であるという2点で68年9月8日に処刑された。(68年9月25日付)

9) オウンミインの解説によれば、ボウ・トゥンニエインの支配力は、1967年の夏、プローム県パウカウン郡内の8カ村全域に及んだという。(67年12月21日付)

「労働者人民日報」紙に掲載された押収文書の写真によれば、トゥンニエインとトゥンシェインの両名も人民裁判にかけて裁かれたようである。トゥンニエインの告発状は手書きであるため判読が容易でないが、(1)調査委員会9名(タキン・チッ、キンヂー、シェイン、ポウンチャー、フラチー、ウールウィン、アウンミン、チャータン、エーミン)、(2)検察委員会が15名(タキン・プ、ニョウアウン、チーアウン、ニョウ、ティンスウエ、ソウウィン、テッ、ミンアウン、オウンミイン、マウンマウンチー、トゥン〔不鮮明〕、アウンミャ、グウェタン、イエーニユン、キンタン)、(3)判事組織が4名(タキン・ジン、タキン・チッ、タキン・プ、アウンヂー)が、それぞれ設置され、トゥンシェインに対しては(1)調査委員会(ニョウアウン、シェイン、フラチー、アウンミャ)、(2)検察委員会(タキン・プ、ソウチー、シェイン、アウンミャ)、(3)判事組織(タキン・ジン、タキン・プ、ニョウアウン)が設けられている。

紅衛兵の中で粛清されたのは、ティントゥン、チャーキン、アウンティンナイン、キンウィン、ソウウィンの5名で、いずれも元学生運動のリーダー達であり、ボウ・トゥンニエイン指揮下の建設隊に所属していた。このうち、アウンティンナインは、先に粛清されたボウ・ヤンアウンの甥であり、ソウウィンは作家ルドウ・ウーフラの息子である。¹⁰⁾これら紅衛兵達の粛清理由は、(1)党本部への謀叛、(2)党の分裂、(3)革命の破壊、(4)修正主義

10) ウー・マウンマウンティン(ビルマ史委員会)の話によれば、ソウウィン処刑の報が伝わると同時に、マンダレーにあるウーフラ宅では、門が閉ざされ、ウーフラ・ドーアマー夫妻は誰にも会わず、部屋の中に引きこもったきりだという。また、ビルマ語日刊紙「人民」(現在停刊中、社主ウーフラ)の編集長をつとめたこともある作家のシェエウーダウンは、ソウウィンの死を悲しんで、人前もはばかり泣き伏したとのことである。(68年9月27日談)

思想となっている。紅衛兵達は68年9月14日に処刑された。(68年9月26日付)

9月24日政府軍第77師団司令部に投降してきたチョンテイ(デルタ地方管区軍副小隊長)の説明によれば、(1)トゥンニエインの考えは、停戦、和平であり、「政府軍の攻撃に対しては、眼には眼をで報いるべし」というタントゥンの赤色権力路線とまっこうから対立していた、(2)粛清された学生運動リーダー達の考え方もトゥンニエインと同じで、国内和平主義であった(68年9月27日付「人民日報」およびビルマ語版「前衛」両紙)というが、トゥンニエインの粛清は、彼が修正主義者だった云々ということよりは、むしろあまりにも実力をもちすぎ、党内における彼の発言力、影響力が大きくなりすぎていたためというのが真因であろう。換言すれば、「派閥」や「群雄割拠」「下剋上」等の存在が絶対に許されない共産党内にあって、委員長に比肩し得るほどの実力を身につけたことが、トゥンニエインやトゥンシェインをして破滅に導いたと言ってよいのではなかろうか。これには、タントゥンの性格という要素も加わっている。タントゥンの性格についてイエーボー・タンは次のように述べている。(67年9月14日付)

“タントゥンは指導層の同志を評価する際、政治的思想の面より、人間としての面に重点をおくタイプの人である。特に、彼は、自分の指揮統率力に匹敵し得る人間、党員からの信頼尊敬の度合が自分よりも高い人物を警戒した。”その一例として、イエーボー・タンは、全ビルマ農民連盟元書記長イエーボー・タンペーを挙げている。タンペーは、共産党がまだ合法政党であった当時、タントゥン(委員長)よりも組合員の支持が厚かった。タントゥンは、これを好まず、タンペーの失脚を企んだ。幸か不幸か、タンペーが病に倒れたので、タントゥンは彼をカレン山地の僻地に追いやり、結果的には病死という形でタンペー

を葬ったという。つまり、タントゥンは、きわめて猜疑心が強く、権力に対する執着心の激しい人間だと言えよう。

なお、紅衛兵達が粛清されたのは彼らがトゥンニエインの指導下にあり、トゥンニエインの思想的影響も最も濃厚に受けていたからにはほかならない。

II ビルマ共産党の基本路線

ビルマ共産党の綱領が入手できないので、その内容については具体的に知るよしもないが、投降者達の説明によってその一端をうかがうことはできる。そこで、今まで明らかにされた記事を整理してみると、およそ次のようになる。

1. ボウ・ソウリン（ビルマ共産党タウング一県委員，67年8月9日投降）の説明
 - (1) 1963年の時点における党の路線（中央委員会決定の1962年路線）は、すでに現状に合わないものになっていた。
 - (2) 1964年路線もまだ曖昧であった。
 - (3) 1965年の政治局路線によって「和平・闘争」の二面路線がしりぞけられ、「政権奪取路線」一本槍になった。
2. ウー・バドゥ（ビルマ共産党マグウェー一県委員，67年11月9日投降）の説明
 - (1) 党の路線は1962年頃から明確さを欠くようになった。
 - (2) 革命政府との「和平交渉」問題が起きてから、政治局の1963年路線にとって代わられた。
 - (3) 交渉決裂後、1964年の中央委員会路線が下されてからも、内容的には「停戦・和平」の形を棄てきれずにいた。
 - (4) 1965年の政治局路線によって初めて「革命政府に対する武力攻撃，勝利，政権奪取」路線となった。
3. ボウ・ミンディン（ビルマ共産党タウング一県委員，67年12月6日投降）の説明

(1) 1950年に「2年以内の勝利」路線が打ち出されたが、それが極左冒険主義へと発展し、地下の革新勢力の衰退を招いたので、翌51年には撤回された。

(2) 1951年の路線は、「平和連立政権」路線であった。

(3) 1955年には「停戦，国内和平」路線となった。

(4) 1964年には再び「徹底抗戦，政権奪取」路線に変わり、「人民最大の敵はネーウィン，重要な闘争は武装闘争，主要な団結は農民層の団結」だということになった。それまで「ビルマの独立は政治的には実現したが，経済的にはいまだ独立していない」という見方であったが，それ以降は「経済的のみならず，政治的にも独立していない」という見解に変わった。（67年12月19日付）

4. オウンミインの解説（67年12月20日付）
ビルマ共産党の1949年路線は，(1)貧民を基盤とし，(2)労働者と連携し，(3)地主層を駆逐せよであった。

5. イェーポー・チーアウンの解説（68年1月6日付）

タキン・タントゥンは，当初ビルマの独立を賞讃支持していたが，1948年3月になると，これを「まやかしの独立」だと非難した。中共と連絡がとれるようになった1950年，「2年以内の勝利」路線を打ち出したが，それが失敗に終わったので，「極左冒険主義」だとして放棄し，PCGとよばれる「平和連立政権」路線に切り替えた。これが一般に「1955年路線」と称されているもので1961年まで続いた。55年路線は61年になると「右翼日和見主義」だとして放棄され，タキン・バティンティンの考えを基にした1962年路線にとってかえられた。62年路線によれば，「革命評議会は，資本家階層を代表する軍事政権である」と規定さ

れ「この軍事政権は武力で打倒されねばならない」とされている。

以上の断片的な資料を整理してみると、ビルマ共産党の活動路線は、およそ次のようになる。

年次	要旨
1948年路線	ビルマの独立は見せかけの独立である。
1949年路線	農民層に基盤をおき、労働者と連携し、地主層を駆逐する。
1950年路線	2年以内の勝利（極左冒険主義だとして、51年に撤回）
1951年路線	平和連立政権の樹立
1955年路線	内戦停止、国内和平（右翼日和見主義だとして61年に放棄）
1962年路線	革命評議会は資本家階層の代表、軍事政権、武力によるその打倒
1963年路線	ビルマは政治的に独立、経済的には独立していない。
1964年路線	徹底抗戦、勝利、政権奪取、ネーウィンは人民最大の敵、農民層の団結と武装闘争の推進、ビルマは政治的にも独立していない。
1965年路線	革命政府に対する徹底的武力攻撃、政策の破壊、勝利、政権奪取。

1966年には党内に思想的対立が起こり、67年には分裂、68年現在は、文化大革命、毛思想の尊奉等の中共路線というのが、今までのあらましである。

そこで、以上の表から、ビルマ共産党の活動をおおむね次の三つの期間に分けることができる。

- 1) 1948年から51年までの武装蜂起時代
- 2) 1951年から61年までの停戦・和平準備時代
- 3) 1962年から現在までの武装再闘争時代

上述のようなビルマ共産党の活動路線の動揺は、(1)ソ連の雪解け、中ソ論争、中共の文化大革命等の世界政治の変動、(2)ウー・ヌ政

権の不安定¹¹⁾、与党 AFPPFL の内紛と分裂¹²⁾ 第一次クーデター、ネーウィン政権の再登場等の国内政治の動向に大きく左右されていると考えてさしつかえない。特に、63年の「和平交渉」決裂後は、共産党の態度を一層硬化させてしまったと言える。

III 党幹部の顔ぶれ

党中央幹部や地方幹部がどのような人達によって構成され、どのように運営されているか。今まで報道された記事を整理してみると、党の機構は、(1)政治局、(2)中央委員会 (3)管区委員会 (4)県委員会 (5)郡委員会という縦割り組織になっており、それぞれに軍事力が付与されている。このうち、政治局と中央委員会が党の意思決定最高機関となっており、党の活動路線もそのどちらかで決定されている。しかし、相互の関係がどのようなものであるのか明らかでない。それぞれの構成メンバーを見ると、政治局が党の最高機関であり、中央委員は政治局員候補だという印象を受ける。なお、それぞれの機構を構成しているメンバーは、次のとおりであるが、これは資料不足のゆえもあって不完全であることをお断わりしておく。

1. 政治局 6人

(1) タキン・タントゥン 党委員長

- 11) 1948年から50年までは、いわばビルマ独立の揺籃期であって、各地で反乱政権が樹立されたり、政府軍の離脱が相次いだりして、ウー・ヌ政権の力は不安定であった。1968年9月21日行なわれた管区軍司令官会議の席上述べられたネーウィン将軍の言葉、「当時のビルマ政府は『ラングーン政府』と陰口をたたかれたほど、弱体な存在であった」は、このことを端的に表わしている。これらの情勢は、共産党に武装革命の可能性を提供したと言えよう。
- 12) 矢野氏によれば「AFPPFL が絶対的統治者としてビルマに君臨していたあいだ、もっぱら沈黙を保ち、政府に対する態度もきわめて軟調であった」共産党が「AFPPFL の分裂後になると、ガラリと態度が変わり、高圧的な調子で政府に迫り始めた」のである。(矢野暢「ビルマの政治的不安定(二)」『法学論叢』第75巻第2号、p.57)

- (2) イェーボー・テー 1967年4月27日
解職, 6月18日粛清
- (3) ゴシャル (バティン) 1967年4月27日
解職, 6月18日粛清
- (4) タキン・チッ
- (5) タキン・ジン 党第2副委員長
- (6) タキン・タンミャイン 北京で粛清された。

現在北京にいると言われるタキン・バティンティンは、党第1副委員長であるが、政治局員であるかどうか明らかでない。ターカドゥの解説(67年6月15日付)によれば「ビルマ共産党の最高評議会とも称すべき政治局には、全部で5人の局員がいたが、今回(1964年)の思想的対立によってタキン・タントゥン、タキン・チッ、タキン・ジンの3名とゴシャル、イェーボー・テーの2名とに分裂した」とあるので、ここではタキン・タンミャインが抜けている。さらに、同紙(67年8月19日付)の記事によると、「政治局員は以前7名いたが、現在は3名にすぎない」とあるから、粛清されたテーとゴシャルを差し引くと、やはりバティンティンはその中に入っていないことになる。バティンティンが党第1副委員長であるという点からみると、元7名いたと言われる政治局員の残りのひとりとは彼であったと考えられるが、5名云々の記事からみると、海外駐在の場合は、政治局員の身分を解かれるようである。

2. 中央委員会 20人

- (1) タキン・タントゥン 委員長
- (2) イェーボー・バティン (ゴシャル) 67年4月27日解職
- (3) タキン・ジン 民族統一連合軍(共産党, KNDO KNU)の結成者
- (4) タキン・チッ
- (5) イェーボー・テー 中央委員会書記長, 67年4月27日解職
- (6) コウ・アウンヂー 北京帰り

- (7) タキン・プ 北京帰り
 - (8) ボウ・ゼーヤ 共産軍最高司令官, 元「三十人の志士」の一人, 68年4月16日射殺される。
 - (9) タキン・ティントゥン 元ビルマ学生連盟委員長
 - (10) イェーボー・ミャ (ティンウー) ペグー山脈管区代表, 自己批判の勧告を受けている。
 - (11) イェーボー・ソウタン デルタ地方管区代表, 自己批判の勧告を受けている
 - (12) イェーボー・トゥッ 上流地方管区代表, 自己批判の勧告を受けている。
 - (13) ボウ・ミョウミイン 上流地方管区代表
 - (14) イェーボー・トゥンマウン (ナッ) 西北管区代表, 自己批判の勧告を受けている。
 - (15) イェーボー・チョーミャ
 - (16) タキン・ペーティン
 - (17) イェーボー・トゥンセイ (バーケー) テナセリム管区代表
 - (18) イェーボー・ヤンアウン 67年12月15日解職, 12月16日粛清, 元「三十人の志士」の一人
 - (19) タキン・バティンティン 北京駐在
 - (20) タキン・タンミャイン 北京駐在, バティンティン一派によって粛清された。
- このうち、ゴシャル、テー、ヤンアウン、タンミャインの4名が粛清され、ボウ・ゼーヤが政府軍に射殺されたので、中央委員の現在の人数は15名ということになる。

3. 管区委員会

- (1) デルタ地方管区 ボウ・ソウタン (委員長), コウ・ウィンマウン
- (2) ペグー山脈管区 イェーボー・ミャ (委員長), ボウ・トゥンニエイン (北京帰り, 粛清), コウ・バニユン (北京帰り), コウ・アウンティン (北京帰り),

- ボウ・ポウンチョー、コウ・テツ、コウ・フラチー、ボウ・セインルイン（射殺）、ボウ・トゥンシェイン（射殺）
- (3) シャン州管区 ボウ・プ（元中央委員会、射殺）、イエーボー・キンアウン（射殺）
- (4) テナセリム管区 イェボー・タンマウン（バーケー）
- (5) 中部管区 ボウ・トゥンザン（書記長、射殺）
- (6) 上流地区管区 ボウ・ミョウミイン（委員長）、ボウ・フラマウン、イエーボー・バトゥ、ボウ・チックン、ボウ・ユアウン、ボウ・モウニョウ（ボウ・アーラーワカ）
- (7) イラワジ管区 フラマウン（会計）
この管区委員のリストは、不完全である。

4. 県委員会

- (1) ペグー県 イェーボー・ウィンアウン（書記長、射殺）、イエーボー・アウンミン、イエーボー・アウントウ、イエーボー・キンニョウ、イエーボー・ソウチー、ボウ・フラミイン（射殺）、ボウ・ソーアウン（軍事委員長）、ボウ・ミヤットゥツ
- (2) タウンゲー県 イェーボー・ヤンアウン、イエーボー・アウンチョー、ボウ・トゥンティン、ボウ・フラチョー、ボウ・タウン、ボウ・ミンマウン、ボウ・ミンアウン、ボウ・ミンディン（投降）、ボウ・ソウリン（投降）、ボウ・ソウマウン（軍事委員長）、ボウ・ティンウィン、ボウ・アウンミイン
- (3) マグウェー県 ボウ・バトゥ（投降）、ボウ・ゾーレー（北京帰り）、マ・ティエー（射殺）
- (4) ヤマーティン県 ボウ・ゾーレー（兼任）
- (5) プルーム県 ボウ・フラチー（委員長）、

- ボウ・エー（書記長、射殺）、コウ・ターウー（チン族）、ボウ・ニエイン（軍事委員長、射殺）、コウ・シュエ、ボウ・タンナウン（射殺）、チッサヤー、
- (6) ターヤーワディー県 ボウ・サントゥン、ボウ・ティンシェイン（北京帰り、軍事委員長）、ボウ・トゥンティン、ボウ・ティンセイン、
- (7) ヒンダータ県 ボウ・トー
- (8) カター県 ボウ・テイントゥン（北京帰り）

この県委員のリストも不完全である。なお、各県委員会の配下に郡委員会があり、メンバーもかなり判明しているが、煩雑になるので省略する。

IV 中共帰りの党員

ボウ・ソウリンの説明によれば（67年8月19日付）、中共帰りの党員達（いわゆる「北京帰り」）は全国いたる所に散在しており、毛思想の鼓吹と反ネーウィン活動に従事しているという。その要点は、(1)反ネーウィン戦線を結成せねばならない、(2)ネーウィンは人民の最大の敵である、(3)ビルマは、政治的にも経済的にもまだ独立していない、(4)権力には、資本主義権力と無産者権力の二つがある、(5)ビルマ共産党は1939年8月15日の結党以来、武装革命の経験をもたないインドおよび英国の共産党を模範としているため根本から誤っている。その結果、議会民主主義制度の中で社会主義建設が可能だと信じこんでいる。

中共帰りの党員達はこのような信条の下にビルマ共産党中央委員会の委員達に次のような質問をつきつけた。(1)二つの制度と敵3人の代表的存在であるネーウィン政府の性格を軍事独裁資本主義だと認めるか、(2)革命によって獲得する権力は無産者権力である。権力に2種あるという説に同意するか、(3)革命的な政治最高組織（政治局）を支持するか（いわ

ゆるゴシヤル、テー問題), (4)中国の文化大革命を支持するか。

北京で筋金入りの毛思想をたたき込まれて帰国したビルマ共産党の党员達, すなわち「北京帰り」とは, どのような顔ぶれなのか, 彼らはビルマ全土に何人くらいいるのか, この点について, ボウ・ミンディン (67年12月19日付) は, ビルマ全国で20ないし30人くらいいると述べているが, その顔ぶれや職務分担は明らかにされていない。イェーポー・バケツの解説によれば, 北京帰り党员達の主な顔ぶれとその受持区域は次のとおりである。(67年12月21日付)

- (1) 上流地方管区 テインミイン, ミンアウン
- (2) 中部ビルマ ゴーレー, アウンキン, マウンコウ
- (3) シャン州 タイアウン
- (4) イラワジ川西部 ボウ・ゼーヤ, バピユ
- (5) ペグー山脈 マウンニョウ, マミョウタン, テインシェイン
- (6) 三派連合(本部) キンヂー, チツマウン
- (7) 党中央本部 アウンヂー, タキン・プ, ニャンチャー, トウンシェイン
- (8) 中央マルクス・レーニン学校 トウンニエイン, ミョウティン, ソウウイン, マウンシエイン
- (9) デルタ地帯 マティンウェー
- (10) 中央労働機構 アウンニエイン, パニユン

このうち, ボウ・ゼーヤは1968年4月16日政府軍に射殺され, トウンニエインとトウンシェインは修正主義者のレッテルをはられて粛清され, マティンウェーは, 政府軍に逮捕された。なお, 1968年初頭開かれた第三次中央マルクス・レーニン主義学校の責任者は, アウンヂーとミョウティンの両名であったと

いわれる。(68年5月11日付)

これら北京帰りの党员達は, 大半が軍事教練を受けるために中共へ派遣された者で, 1952年ボウ・タンシュエに引率された人民解放軍の将校40人が第一次組で, パテインティンに引率された100人が第二次組, ボウ・ゼーヤに引率された80人が第三次組であると言われる。(67年8月7日付)

V ビルマの紅衛兵達

党中央本部における「紅衛兵」の組織づくりは, 1966年8月16日, ターヤーワディー県ジーゴン郡内で開始された。当日, タキン・タントウン, タキン・チッおよび北京帰りのアウンヂー, タキン・プ, トウンシェイン, ミョウティン等が会合を開き, 党内における青少年層の育成, 組織化が討議された。その結果, 青少年の育成は長期計画としてとりあげられることになり, タントウン, アウンヂー, トウンシェインの3人が職務を分担することになった。まず, 14才から18才までの青少年20数人からなるグループが編成され, トウンシェインがリーダーとして責任をもった。

アウンヂーやトウンシェインは, 連日これらの青少年達と討論し, 彼らの思想教育にあたった。特に, 次のような点が強調された。“革命とは, 来客にごちそうをふるまうことでもなければ, 編物を編むことでもなく, 詩をつくることでもない。また, 舗装された道を歩くことでもなければ, 同情心や憐憫の情を涵養することでもない。革命とは, 人を殺すこと¹³⁾だ。”“今や君達は世界を支配している。ビルマを支配している。君達にとって恐

13) 白旗共産党员の手によって殺害された農民の数は, 1967年6月から1968年6月までの間に301人に達している。(68年8月13日付) 被害者を地区別に分けてみると次のようになる。(1)プローム県108人, (2)ペグー県59人, (3)ヒンダータ県33人, (4)ターヤーワディー県36人, (5)パテイン, ピャーボン両県17人, (6)モンユワー県21人, (7)メルギー, タボイ, タトン3県27人。

れるものは何一つない。君達にとって大切なことは「五敢精神」で努力することだ。「五敢精神」とは、勇敢に考え、勇敢に話し、勇敢に行動し、勇敢に突進し、勇敢に革命を実現することだ。このことは、肝に銘じておかねばならない。”“われわれには肉親は存在しない。愛情や誠実といったような人間の弱点もあってはならない。われわれには階級意識以外、何も無いのだ。だから、必要とあらば、たとえ相手が両親、兄弟、夫婦であろうと、殺し得るだけの勇気を持たねばならない。”

このようにして訓練された紅衛兵達は、「党のためなら、いつでも喜んで命を投げすてる」という信念をもつようになった。特に、ソウウィンは、「自分の両親¹⁴⁾は、資本家階級に属する搾取者だ。ぼくはこの搾取者達を自らの手で裁く」と声明して、紅衛兵の特別モデルだと賞賛を浴びた。また、政治局員タキン・チットの娘マエーニエインは「和平を口にする者は、たとえわたしの恋人であろうとも、それはわたしの敵だ。殺さねばならぬ」と語っている。

1967年4月5日、アウンヂーとタントゥンが中央本部で開催した青少年特別会議（13才から18才までの者のみ出席を認められた）の席上、タントゥンは次のように述べた。「わがビルマにおいても文化大革命が始まった。君達は紅衛兵だ。われわれが信頼しているのは、君達なのだ。今の大人達は君達ほど革命的ではない」（以上全文、68年4月27日付）

これら「紅衛兵」の中心をなす者は、ラングーン大学学生運動の元リーダー達で、次の10人の名前が判明している。(67年12月28日付)

名	前	経	歴
(1)	ティントゥン	ビルマ学生連盟書記長	

14) ソウウィンの両親は、現在停刊中のビルマ語日刊紙「人民」の社主であり、少数民族の民話を編纂していることでも有名な作家ルドウ・ウーフラと、女流作家ドーアマーである。

- | | | |
|------|-----------|----------------------------|
| (2) | ニョウウィン | 大学学生自治会執行委員 |
| (3) | フラウン | 大学学生自治会執行委員 |
| (4) | タードゥ | 大学学生自治会書記長 |
| (5) | ティントゥン | 大学予備軍隊長 68年9月14日肅清 |
| (6) | チャーキン | 大学予備軍隊長 68年9月14日肅清 |
| (7) | ポウチン | ラングーン管区学生連盟委員長 |
| (8) | マウンテッ | ビルマ学生連盟委員長 結核で死亡 |
| (9) | アウンテインナイン | 大学学生自治会執行委員 68年9月14日肅清 |
| (10) | ソウウィン | ラングーン大学学生連盟執行委員 68年9月14日肅清 |

VI 幹部党員の射殺

革命評議会は、1963年の和平交渉決裂後、共産党に対する徹底的な掃討作戦を開始した。ペゲー山脈の西部（プローム県、ターヤーワディー県）と東部（ペゲー県、タウンゲー県）で討伐作戦に従事しているのは、中央軍管区司令官ティンウー大佐配下の第77師団（師団長ティンスウェー大佐）と、第88師団（師団長タンティン中佐）である。今まで、政府軍によって射殺された幹部党員の名前と職責は次のとおり（カッコ内の数字は、射殺された年月日）。(1)ボウ・プ（シャン州管区委員, 1967. 8. 22), (2)トゥンザン（中部管区書記長, 1968. 4. 1), (3)セインルイン（ペゲー山脈管区委員, 1968. 9. 19), (4)トゥンシェイン（ペゲー山脈管区委員, 1968. 9. 19), (5)フラマウン（イラワジ管区委員, 1968. 9. 19)。

ビルマ共産党にとって最大の打撃は、北京帰りの党員であり、共産軍最高司令官ボウ・ゼーヤの死であろう。ボウ・ゼーヤは、全ビルマ学生連盟の委員長をつとめ、後タキン・

フラマウンという名で独立運動に参加、いわゆる「三十人の志士」の一人でもある。ビルマ防衛軍（BDA）当時は大隊長¹⁵⁾であったが、後大佐に昇任、アウンサン将軍の下で国防次官をつとめたこともあった。

1968年4月16日行なわれた政府軍の討伐作戦によって、ボウ・ゼーヤは、プローム県とターヤーワディー県境にある共産党本部で射殺された。(68年4月19日付)

Ⅶ 委員長タキン・タントゥンの狙撃

9月27日、ビルマ共産党委員長タキン・タントゥンの殺害説が伝えられた。犯人は、共産党デルタ地方管区軍の副小隊長チョンテイで、先に粛清されたトゥンニエインの部下である。チョンテイの自供によれば(68年9月27日付「前衛」「人民日報」)。

- (1) トゥンニエイン以下70名のデルタ管区軍は、党本部に召集を命ぜられ、武装解除させられた上で、トゥンニエインが逮捕された。
- (2) 副小隊長の地位にあるチョンテイは、ト
- 15) 当時の「ビルマ防衛軍」は3個大隊から編成されており、それぞれボウ・ネーウィン(第1大隊)、ボウ・ヤンニン(第2大隊)、ボウ・ゼーヤ(第3大隊)が隊長に任命されていた。そして、それら全体をボウ・テーザ(アウンサン)司令官およびボウ・レチャー(革命政府によって逮捕投獄されていたが1968年2月27日釈放された)副司令官が統轄していた。(ボウ・タンダイ「独立闘争の記録」1967より)

ゥンニエインの追随者とみられて粛清されることを恐れ、タントゥン殺害と逃亡を意識するようになった。

(3) 9月24日、タントゥンが、タウンゲー県内の党本部から用を足しに外へ出たので、チョンテイは25ヤードほど離れた所からタントゥンを狙撃し、直ちに政府軍第77師団司令部へ投降した。

(4) 銃弾はタントゥンの左脇腹に命中し、タントゥンはその場に倒れた。死んだのは間違いないと思われる。

第77師団の現場調査の結果、タントゥンが狙撃されて倒れたといわれる場所で多数の血痕を発見、またチョンテイが狙撃に用いた銃を隠したと言われる場所から一丁のライフル銃を発見した。(68年9月27日付)

タキン・タントゥンははたして死んだのであろうか。この答は、時が与えてくれるであろう。だが、ビルマ共産党の将来については誰も予測することができない。さしあたり、後任委員長には第1副委員長タキン・パティンティンが昇格すると考えるのが常識である。しかし、党内には、粛清されたイエーボー・テーの配下がまだ多数残っているし、修正主義グループが今後どのような巻き返しにでるか予測できない。ビルマ共産党は、これからどこへ行くのだろうか。

(筆者は、現在国立ラングーン外国語学院日本語科教授としてラングーン在住)